

デジタル副読本

『すごいなあ、わがまち』を活用した世界遺産学習

【檀原市教育委員会】

1. はじめに

檀原市は、世界遺産候補地である「飛鳥・藤原の宮都」の構成資産である藤原宮跡をはじめとする貴重な史跡を数多く有する自治体です。本市では、地域の子どもたちが自らの郷土に対する誇りと理解を深めることを目的として、令和3年度（2021年）3月より世界遺産学習の具体的な検討を開始しました。現在、隣接する桜井市および明日香村と連携し、教育的視点と行政の専門性を組み合わせた学習プログラムを推進しています。本年度途中より、世界遺産学習を実施しています。

2. 教育目標

1. 幅広い知識と考える力を身につけ、真理を求める態度を養い、豊かな心とともに、健やかな身体を養う。
2. 生命を尊び、個人の価値を尊重してその能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、他者と協働し行動する力や働く意欲、働く力を養う。
3. 市民の学ぶ意欲を支え、学校・家庭・地域の連携を図り、社会全体の教育力の向上に寄与する姿勢を養う。
4. 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた郷土への誇りと愛着を培うことで、檀原市の発展に寄与する心を養う。

3. 教育委員会・学校での取組

檀原市の世界遺産学習の学習目標は、単なる知識の習得にとどまらず、以下の4点を達成することにあります。

1. 感銘と誇りの醸成：地域の史跡への発見を通じて「すごいなあ」という素直な感動と、郷土を愛する心を育む。
2. 主体的・体験的な学び：児童自らが問いを立てて探究し、発信する姿勢を養う。
3. 保存に携わる人々の思いの理解：文化財を守ることの意義を理解する。
4. 未来への展望（SDGs）：過去の遺産から地域の未来図を描く力を養う。

檀原市では、小学校4年生の「総合的な学習の時間」において、
間10時間程度の世界遺産学習を展開しています。



- （デジタル副読本の活用）「飛鳥・藤原世界遺産学習副読本作成委員会」が中心となり開発した、デジタル副読本『すごいなあ、わがまち』を主要教材として導入しています。本教材は、世界遺産と地域のつながりや「飛鳥・藤原」の歴史的価値を、動画やデジタルコンテンツを通じて視覚的に学べる構成となっています。

- (教科横断的な展開) 世界遺産学習を単発の活動や副読本を読むだけの活動で終わらせないため、他教科と系統的につなげる「世界遺産学習の木」の概念を提示しています。各教科への展開例も下記のように提示をしています。

算数：藤原宮の「1 km四方」という広さを計算し、規模を実感します。理科：水落遺跡の「水時計」の仕組みから当時の科学技術を学ぶ。国語：『日本書紀』の漢字や『万葉集』の和歌を通じて当時の言葉に触れる。社会：平城京遷都に伴う建物の移築や建築資材の運搬について考察する。

- (体験的・創造的な学習活動) 教室内の学習に加え、藤原宮跡などの資産群や資料館への見学を実施しています。また、市役所の世界遺産登録推進課職員や地域の方から直接話を聞く機会を設けています。学習のまとめとしては、プレゼンテーションや動画制作、「飛鳥・藤原カルタ」の作成など、多様な表現方法を用いて家族や地域へ発信する活動を行っています。



(学校での取組)

今年度は、11月からデジタル副読本が使用できるようになったため世界遺産学習は、モデル校として、2校の実施となりました。

学校での授業の流れは、世界遺産副読本はあくまで、世界遺産学習の入り口であって、副読本を学習したことから、世界遺産学習の木のイメージのように、教科を横断したり、地域学習につなげたりと、各学校でどのようなゴールを設定するのかを考え、向かう方向性や学習の経過を重要視しています。今年度実施した1校では、藤原京跡を見学し、橿原市には世界遺産候補となるものがたくさんあることを児童は知ることができました。また児童は、飛鳥・藤原の世界遺産候補をめぐるコースがあることを藤原京資料館で知り、今度は自分たちの校区にある歴史的な史跡をめぐるコースを作るという活動につなげることができました。ICTを活用し、校区のマップにコースを示しながら写真をつけ、分かりやすく表現しました。世界遺産候補を見に来た観光客に対して案内するという対象がはっきりしていたため、児童も初めて来た人にも分かりやすくということを考え、作成する姿が見られました。今回は、年度末の活動であったため、実際に配布したり、掲示するという活動まではできませんでした。



4. おわりに

本年度の取組を通じて、児童が地域の価値を発見し、未来への提案を行う姿勢が見られました。今後の課題は、デジタル副読本の学習だけで完結させず、いかに各校が独自のゴールを設定し、地域学習や横断的な学習へ発展させるかという点にあります。今後はオンライン発表会などを通じ、市町村を越えた児童同士の交流を深め、さらなる学習の充実を図る予定です。また、各校の取り組みを共有し、さらに活動内容のバリエーションが広がってほしいと考えています。